研究課題「農村コミュニティにおける地域振興と持続可能性
ータイの産業村開発事業の事例と日本への示唆ー」

研究代表者：藤井　敏信（国際地域学部　教授）
研究分担者：［研　究　員］
髙橋　一男（国際地域学部　教授）
［客員研究員］
川澄　厚志（国際地域学部　特任講師）
宮島　良明（北海学園大学経済学部　准教授）
佐々木　康彦（財団法人山の暮らし再生機構　主任支援員）
［研究協力者］
佐藤　正喜（バーンラック財団　事務局長）
Chinnaphatana Sangkhawuttichaiyakul（タイ工業省コミュニティ産業局　特別顧問）
吉田　圭助（ドゥアン・プラティープ財団　ボランティア）

研究期間／平成 22 年 4 月 1 日～平成 25 年 3 月 31 日（3 年計画のうち最終年次目）

平成 24 年度交付額／1,516,000 円

第 1 部：最終年次の経過および研究成果の概要

川澄厚志

1. 研究の背景と目的

本研究の目的は、タイの工業省、観光庁、日本の JBIC（現在は JICA に統合されている）の支援によって、1994 年から段階的にタイ全国の農村コミュニティで実施されている産業村開発事業を対象に、事業の妥当性、自立発展性、及びコミュニティセンターの機能と役割について検証を行うことである。さらに、新潟県長岡市山古志地域（以下、山古志）の農産物直売所等の事例と比較検証を行いつつ、計画論的な視点から持続可能な開発とはどのようなものか、再考を試みるものである。

近年、日本では、過疎化や高齢化により、中山間地や離島を中心に限界集落または消滅集落の問題が現実のものとなりつつある。本研究で山古志を比較対象とした理由について、震災後の山古志の高齢化率は、10 年後の未来に予測していた数値に一気に達したといわれている。また、山古志は震災から復興し現在は農的暮らしを取り戻しつつあるが、震災後に長岡市と合併し、対集落か対地域かといった支援の対象をどうしていくのか、耕地放棄、次世代の育成など、ムラの暮らしに関する課題は山積している。一方、対象としたタイの農村でも高齢化、若者の離村が進み、日本と同様の問題を抱えるところが多いことが指摘できる。そのような中にあって、産業村開発事業に参加している農村コミュニティでは、住民が誇りを持てるような「地域」の構築と、その中での人材育成や特産品の生産が試みられており、学業や出稼ぎで一度は都市に出た若者が村へ帰ってくるという事例も見受けられる。このように、日本にはないダイナミックスがタイの農村コミュニティには存在し、その要因を探ることは日本の農村開発や集落再生の一助になりうると考えている。具体的には、以下の 6 点を本研究で明らかにする。

(1)　対象事例の事業の特徴を整理し、産業村開発事業に参加するに至った経緯を明らかにする。
(2)　対象事例のコミュニティ形成の経緯と地域住民の経済・社会属性を明らかにする。
(3)　対象事例におけるコミュニティセンター（道の駅）の現状と課題、およびその役割について明らかにする。
(4)　山古志における産業と農産物直売所の現状と課題を明らかにする。
(5)　対象事例における計画立案段階から評価段階までの一連の開発プロセスを、計画論的観点から整理し、これまでの運営状況を明らかにする。
(6)　対象事例の地域特性及びその位置づけを明らかにしたうえで、それぞれの国・地域間で地域振興策にどのような差異が見られるのか、また、その中から得られた教訓や示唆を互いに共有することは可能なのかについて比較検証する。

2. 研究内容

主な研究方法は、次の二つの通りである。

第一は、タイの産業村および新潟県山古志において、現地調査（質的・量的調査）を行うことである。それによって、具体的な一次データを収集しケーススタディとする。

第二は、ケーススタディと先行事例との比較により、産業村に関する全体像を把握することである。先行事例として、大分県の一村一品運動を想定している。

［ケーススタディ］

これまでに継続的な現地調査を実施しているプラチュアップキリカーン県のフェーイグルアップ村、タコンシータマラート県のキリウォン村、スラータニー県のファーレーン村に加え、本研究ではスパンブリ県・ウトン郡・カム村とウタイタニ県・バーンライ郡・ナタポー村を調査対象地域として選定している。これまでに、平成 22 年 9 月、平成 23 年の 9 月、平成 24 年 8 月、9 月にタイの調査対象地域で現地調査を実施した。また、タイの産業村開発事業の検証に止まらず、地域振興について国や地域間で何らかの教訓や示唆を共有することが可能なのか、山古志の直売所の実態や地域復興支援員の展開事例を参考にし、持続可能な開発とはどのようなものかを再考するために比較検証していく。

［研究組織］

本研究プロジェクトは、5 名の研究分担者、2 名の院生研究員、3 名の研究協力者により、共同で研究を実施している（最終年度は藤井敏信が研究代表者、4 名の研究分担者、3 名の研究協力者による研究実施体制であった）。

主な役割分担と予想される成果は次の通りである。①川澄の分担内容は、研究総括・調査研究（タイ、山古志）であり、日本への示唆となりうる持続可能な農村開発の計画論について分析する。②藤井の分担内容は、日本における都市と農村との比較研究を通してマネジメント型の開発手法を構築する。③髙橋の分担内容は、タイにおける都市と農村との比較研究を通して社会学的視点からコミュニティ開発を考察する。④宮島の分担内容は、調査研究（タイ）であり、経済学的視点から循環型社会について分析する。⑤佐々木の分担内容は、調査研究（山古志）であり、地域開発の視点から支援員制度について分析する。

研究協力者は以下の通りである。ドゥアン・プラティープ財団の吉田は、産業村の福祉支援の実態と空間的特性について分析する。バーンラック財団の佐藤正喜氏、タイ工業省コミュニティ産業局特別顧問の Chinnaphatana Sangkhawuttichaiyakul 氏の 2 名は、現地の調査協力者である。

［年次計画］

平成 22 年度は、本研究の目的（1）から（4）を進めた。また、山古志における直売所の現状と課題及び、地域復興支援員の制度については、東洋大学福祉社会開発研究センター・プロジェクト 2 と連携し本研究を進めてきている。

平成 23 年度は、引き続き研究目的の（1）から（4）を進めた。山古志に関しては、3 月と 8 月に地域復興支援員制度に関する補完調査を実施した。平成 23 年度の研究成果の公表状況については、日本建築学会大会（関東）で 4 本の口頭発表、日本都市計画学会学術研究論文発表会（査読付）で 2 本の学術論文と口頭発表であった。

平成 24 年度は、タイの調査を補完しつつ、プロジェクト最終年度として本研究の目的である（5）と（6）を進めた。平成 25 年 2 月には、本研究のプロジェクト成果報告書を刊行する予定である。本研究プロジェクトの研究成果については、研究分担者がそれぞれ積極的に平成 25 年度の日本都市計画学会、日本建築学会、日本国際観光学会、日本タイ学会等の学術論文や学会研究発表大会で成果の公表を行っていく予定である。

3. 研究経過および成果の概要

［研究会の実施について］

第 1 回研究会は平成 22 年 5 月 8 日に、平成 22 年度東洋大学研究所プロジェクト（研究代表者：川澄厚志）と、ACHR（アジア居住ネットワーク）勉強会（稲本悦三主宰）との共同研究会（於東洋大学）として実施した。

第 2 回研究会は平成 22 年 12 月 3 日に、宮島良明研究員と年度末報告書に向けた打ち合わせ（於北海学園大学）を実施した。

第 3 回研究会は平成 23 年 6 月 18 日に実施した（於東洋大学）。発表者と報告タイトルは次の通りである。報告①佐々木康彦「中越地震からの復興プロセス」、報告②宮島良明「循環型地域経済に関する一考察：北海道十勝地域の小麦ネットワークを事例として」、報告③川澄厚志「タイの産業村開発事業の可能性と課題：内発的発展論の視点より」、である。

第 4 回研究会は平成 24 年 8 月 20 日に実施した（於タイ・バンコク都）。参加者は、吉田圭助研究協力者とアン・ジャルーンエンサイ研究協力者であり、平成 24 年 8 月 18 日と 19 日に実施したナタポー村での現地調査の報告や年度末報告書、プロジェクト成果報告書に向けた打ち合わせを実施した。

第 5 回研究会は平成 24 年 9 月 9 日に実施した（於新潟県長岡市山古志地域）。参加者は、佐々木康彦研究員であり、平成 24 年 9 月 8 日に実施した山古志地域での現地調査の報告や年度末報告書、プロジェクト成果報告書に向けた打ち合わせを実施した。

これまでの研究会において、本研究で取り上げる産業村開発事業は、OTOP（One Tambon One Product：タイ一村一品運動）のような形で大分県の一村一品運動を参考にしながらも、それ以前からタイ独自の施策として地域性を確保しつつ、観光振興などを視野に入れた取り組みを行ってきたと言える、との見解に至っている。ここで重要なことは、タイの産業村開発事業が、農村コミュニティの維持、発展を主眼に、地域特有の資源や昔からあった技術を活かした製品の生産、人材育成等を行っていることである。それは、一村一品運動でいわれているようなグローバルな視点ではなく、地域資源を生かした開発事業という観点が重視されている結果でもある。

本研究の学術的な特色は、このような地域特有の事情を現地調査により明らかにしようとする点にあり、またこの点が本研究の独創的な点でもある。既存の研究の中にも、当事業を紹介したものは多いが、産業村開発事業を的確に評価・分析したものは見当たらない。本研究では、コミュニティの独自性を確保しつつ、「開発」に取り組む農村の事例を取り上げることにより、コミュニティ開発論と経済学の立場から、地域資源の活用による地域産業の育成がどのようなものかを考察している。同時に、地域リーダーやネットワーク（外部との関係も含む）といった開発アク

ターが地域振興に果たす役割、および開発プロセスなどについても検討を加える。これにより、持続可能なコミュニティ開発の未来を見通すことが可能となり、今後の日本とタイの地域振興策を考える上での一助となりうると考えている。

［現地調査の実施について］

主な現地調査の実施状況については、以下の通りである。

① 平成 22 年 8 月 5 日－8 日：山古志（出張者：佐々木、川澄）
② 平成 22 年 9 月 14 日－17 日：タイ、スパンブリ県・ウタイタニ県（出張者：宮島、川澄）
③ 平成 23 年 8 月 6 日－7 日：山古志（出張者：佐々木、川澄）、福祉社会開発研究センターとの共同調査。
④ 平成 23 年 9 月 8 日－14 日：タイ、スパンブリ県・ウタイタニ県（出張者：宮島、川澄）
⑤ 平成 24 年 8 月 17 日 - 20 日：タイ、ウタイタニ県（出張者：川澄）
⑥ 平成 24 年 8 月 29 日 - 9 月 6 日：タイ・ナコンシータマラート県（出張者：宮島、川澄）
⑦ 平成 24 年 9 月 8 日 - 9 日：山古志（出張者：佐々木、川澄）

上記①と③の山古志地域の調査に関しては、すでに日本建築学会や日本都市計画学会（査読付論文）として研究成果を公表している。

上記②と④と⑤と⑥のタイ現地調査に関しては、平成 25 年度の日本都市計画学会、日本建築学会や日本タイ学会等の査読論文として成果を公表すべく現在作業中である。また、プロジェクト成果報告書には、農村基金や「6 次産業」化の可能性について盛り込むことを当研究所プロジェクトメンバー間で確認している。そして、産業村プロジェクトのメンバーを小規模住民組織として捉え「産業村プロジェクトにおける小規模住民組織の役割と機能」について取りまとめていく予定である。

平成 23 年 9 月に実施したタイ現地調査において、次のテーマについて活発に議論がされた。①道の駅（JBIC の円借款で村に建てられたコミュニティセンター）とホームステイ事業の実態（売り上げ数、客数等、観光の視点から）、②農業（耕作の割合、収入等）、③経済（就業構造、収入、支出等）、④マイクロクレジット（農村基金）、⑤社会関係（出稼ぎ労働、村の平均年齢、若者の U ターンの実態、住民組織・グループ活動、住民間の関係性等）、⑥都市計画（村の空間、福祉）、⑦産業村プロジェクトのプロセス、である。

平成 24 年 8 月と 9 月のタイ現地調査において質問紙調査を実施した。質問紙調査の有効回答数は、ナタポー村が 74 票（全世帯の悉皆調査）、キリウォン村が 130 票（全世帯 1050 世帯からのランダム抽出）であった。調査結果の詳細は、第 2 部の研究成果報告を参照にされたい。

［主な平成 24 年度における業績等］

(1) 藤井敏信、「日本の国づくり」、東洋大学編著、『哲学をしよう！考えるヒント 30』、大成出版社、pp.92-104、2012
(2) 髙橋一男、「社会学から見た内発的発展 - タイのコミュニティ開発のプロセスをめぐって - 」、北脇秀敏他編、『国際開発と環境－アジアの内発的発展に向けて－』、pp.12-35、朝倉書店、2012
(3) 川澄厚志、「タイにおけるマイクロクレジットを基調としたコミュニティ開発の展開」、北脇秀敏他編、『国際開発と環境－アジアの内発的発展に向けて－』、pp.37-39、朝倉書店、2012
(4) 川澄厚志、「一村一品運動と地域振興」、北脇秀敏編、『国際開発と環境－アジアの内発的発展に向けて－』、pp.118 - 120、朝倉書店、2012
(5) 川澄厚志、「社会的支援の展望」、菊地章太他編、『山古志を生きる－山あいの小さなむらの未来』、博進堂、2013 年 4 月刊行予定
(6) 佐々木康彦、「外的パワーと持続的むらづくり」、菊地章太他編、『山古志を生きる－山あいの小さなむらの未来』、博進堂、2013 年 4 月刊行予定

第 2 部　研究成果報告

報告①　キリウォン村（南タイ）とナタポー村（中部タイ）における アンケート調査（2012 年度実施）の結果概要

宮島良明

1 アンケート調査の目的と方法

2012 年度、本研究プロジェクトは、タイの産業村開発事業による農村コミュニティの地域振興について考察するため、産業村に指定された 2 つの村でアンケート調査を実施した。ひとつは、南タイに位置するナコンシータマラート県のキリウォン村である[i]。もうひとつは、中部タイのウタイタニ県ナタポー村である[ii]。

ナタポー村には、2012 年 8 月に研究代表者の川澄厚志氏（2012 年度は藤井敏信氏が研究代表者）が、キリウォン村には、9 月に川澄氏と筆者が現地を訪れ、直接、村のリーダーにアンケート調査の趣旨を説明のうえ、村の住民の理解を得ながら対面方式により、調査票への記入を行ってもらうよう依頼した。なお、アンケート調査に向けた両村との調整や、調査票の回収作業などは、2 人の現地協力者の協力を得ながら進めた。ひとりは、吉田圭助氏である。元東洋大学の大学院生で、現在は、タイのバンコクに事務所があるプラティープ財団にて、ボランティア活動をしている。もうひとりは、アン・ジャルーンエンサイ氏ある。現在は、バンコクの日系企業で働き、2012 年 10 月から 12 月まで、日本語習得のため日本に留学している。

2 アンケート調査の結果概要

実際のアンケート調査は、2012 年 8 月から 10 月にかけて行った。図表 1 はアンケート調査の結果概要をまとめたものである。

アンケート調査の有効回答数は、キリウォン村が 130、ナタポー村が 74 である。アンケート回答者の「平均年齢」は、キリウォン村が 38.8 歳、ナタポー村が 53.2 歳とキリウォン村のほうが若い。タイの農村でも、日本の農村と同じく、高齢化が問題となることがある。そのようななか、産業村プロジェクトの成功事例として取り上げられることが多いキリウォン村には若い人も多くおり、今回のアンケート調査では、そのような村の事情が反映されていることもわかる。

さらにキリウォン村に特徴的なのは、アンケート回答者の「学歴」である。高校卒以上と回答したひとが 73 人と、全体の 56.2%をしめている。なかでも、大学、短大、技術専門学校、大学院と回答したひとが 44 人（同 33.8%）いた。大学などがバンコク近郊に多く存在する現状をふまえると、キリウォン村の若いひとのなかには、一度、進学により村を離れ、バンコクなどの都市部に出て行くが、卒業後、村に帰ってくるというパターンのひとが少なくないことがわかる。一方、ナタポー村では、小学校卒（小学 4 年卒含む）と回答したひとが 63 人ともっとも多く、全体の 85.1%であった。

もちろん、大学などの進学には、少なくない費用も伴う。今回のアンケートでは、キリウォン村の回答者の「世帯収入（月額）」の平均は、10,010 バーツであった。ナタポー村の回答者の「世帯収入（月額）」の平均が、17,749 バーツであることを考えると、キリウォン村の住民の収入がとりわけ高いわけではない。むしろ、回答者の平均年齢が高い分、ナタポー村の平均収入のほうが高い結果となっている。

では、教育費はどのようにまかなわれるのか。今回のアンケート調査では、「債務の有無」につ

---

[i] キリウォン村の概要については、地域活性化研究所の本年度成果報告書にある吉田報告を参照。
[ii] ナタポー村の概要については、地域活性化研究所の 2011 年度成果報告書にある吉田報告を参照。

が高い結果となっている。

では、教育費はどのようにまかなわれるのか。今回のアンケート調査では、「債務の有無」について聞いた。キリウォン村では、回答者の 57.7%（75 人）が、債務があると答えた。そのうち、88.0%のひとが、貯蓄組合から借り入れを行っている。キリウォン村の貯蓄組合は有名であるが、今回のアンケート調査からも、その利用率の高さなどが確認できた。「債務の使い道」をみると、「日常経費」と答えたひとがもっとも多く 42.7%、次に「投資（起業）」が 33.3%、「教育費」「住宅建設」が 21.3%とつづく。高校・大学進学などの費用に、債務の一部が使われていることがわかる。

一方、ナタポー村では、債務があると回答したひとは、全体の 54.1%（40 人）であった。「債務の借入先」としては、ビレッジファンドが 95.0%ともっとも利用率が高く、ついで協同組合（70.0%）、貯蓄組合（65.0%）が多い。「債務の使い道」をみると、キリウォン村同様、ナタポー村でも「日常経費」と答えたひとがもっとも多く、債務があると答えたひとのうち 95.0%となった。また、22.5%のひとが「教育費」に使ったと答えている。ナタポー村で特徴的なのは、借り入れを「投資（起業）」に使ったと答えたひとが多いことである。産業村プロジェクトでは、小規模な住民グループがさまざまスモールビジネスを展開し、コミュニティセンターなどで販売する場合が多いが、その起業の資金は、少なからず借り入れによっているということがわかった。違う言いかたをすれば、産業村プロジェクトにより、村のなかで積極的な「投資」が行われていると言えるかもしれない。この点が、今後の研究の焦点となろう。

（写真）キリウォン村の貯蓄組合の窓口（2007 年 8 月 24 日、筆者撮影）

図表1　タイ産業村のアンケート調査の結果概要

キリウォン村

回答者の性別	（人）	（%）
女性	96	73.8
男性	32	24.6
不明	2	1.5
計	130	100.0

世帯主	（人）	（%）
世帯主である	31	23.8
世帯主ではない	78	60.0
不明	21	16.2
計	130	100.0

年齢	（歳）
平均年齢	38.8
標準偏差	12.9

学歴	（人）	（%）
小学4年卒	23	17.7
小学校卒	10	7.7
中学校卒	16	12.3
高校卒	29	22.3
技術専門学校	13	10.0
短期大学	13	10.0
大学	17	13.1
博士課程	1	0.8
その他	3	2.3
不明	5	3.8
計	130	100.0

婚姻形態	（人）	（%）
未婚	29	22.3
既婚	84	64.6
離別	1	0.8
死別	10	7.7
不明	6	4.6
計	130	100.0

回答者の職業	（人）	（%）
公務員	4	3.1
民間会社勤務	2	1.5
自営業	4	3.1
農業	60	46.2
日雇い労働	12	9.2
商売（天秤棒、手押し	2	1.5
主婦	5	3.8
学生	3	2.3
無職	2	1.5
その他	2	1.5
不明	34	26.2
計	130	100.0

ナタポー村

回答者の性別	（人）	（%）
女性	38	51.4
男性	36	48.6
計	74	100.0

世帯主	（人）	（%）
世帯主である	50	67.6
世帯主ではない	23	31.1
不明	1	1.4
計	74	100.0

年齢	（歳）
平均年齢	53.2
標準偏差	14.5

学歴	（人）	（%）
小学4年卒	42	56.8
小学校卒	21	28.4
中学校卒	6	8.1
高校卒	3	4.1
短期大学卒	1	1.4
不明	1	1.4
計	74	100.0

婚姻形態	（人）	（%）
未婚	5	6.8
既婚	47	63.5
離別	5	6.8
死別	16	21.6
不明	1	1.4
計	74	100.0

回答者の職業	（人）	（%）
農業	53	71.6
日雇い労働	4	5.4
不明	17	23.0
計	74	100.0

（出所）吉田圭助氏が集計したアンケート結果より宮島作成。

図表1　タイ産業村のアンケート調査の結果概要（つづき）

キリウォン村

世帯の特徴	（人）	
平均家族構成員数	3.8	
平均労働者数	2.0	

世帯収入	（バーツ）	
平均（月額）	10,010	

債務の有無	（人）	（%）
債務あり	75	57.7
債務なし	41	31.5
不明	14	10.8
計	130	100.0

債務の借入先	（人）	（%）
銀行	36	48.0
民間貸業者	7	9.3
協同組合	1	1.3
貯蓄組合	66	88.0
ビレッジファンド	24	32.0
親戚	5	6.7
コミュニティ内の友人	5	6.7
その他	1	1.3
*複数回答　計	145	100.0（75人）

債務の使い道	（人）	（%）
住宅建設	16	21.3
土地買収	1	1.3
日常経費	32	42.7
教育費	16	21.3
医療・福祉費	3	4.0
住宅修理費	2	2.7
借金返済	11	14.7
投資（起業）	25	33.3
その他	4	5.3
*複数回答　計	110	100.0（75人）

債務平均額	（バーツ）
債務平均額（世帯）	57,652
無回答	

ナタポー村

世帯の特徴	（人）
平均家族構成員数	3.4
平均労働者数	2.4

世帯収入	（バーツ）
平均（月額）	17,749

債務の有無	（人）	（%）
債務あり	40	54.1
債務なし	31	41.9
不明	3	4.1
計	74	100.0

債務の借入先	（人）	（%）
銀行	9	22.5
協同組合	28	70.0
貯蓄組合	26	65.0
ビレッジファンド	38	95.0
*複数回答　計	101	100.0（40人）

債務の使い道	（人）	（%）
日常経費	38	95.0
教育費	9	22.5
住宅修理費	1	2.5
借金返済	15	37.5
投資（起業）	38	95.0
*複数回答	101	100.0（40人）

債務額	（バーツ）
債務額（世帯）	30,000
無回答	

（出所）吉田圭助氏が集計したアンケート結果より宮島作成。

第 2 部　研究成果報告

報告②　タイの産業村における居住環境の特性
―ナタポー村とキリウォン村における質問紙調査の結果から―

川澄厚志

はじめに

タイにおける産業村開発事業は、1994 年からタイ工業省、観光庁、および日本の JBIC の支援により開始された伝統工芸品の生産による村落開発政策である[i]。平成 24 年度における筆者らのグループでは、この産業村開発事業を評価するにあたり、2012 年 8 月と 9 月にウタイタニー県のナタポー村とナコーンシータマラート県のキリウォン村において質問紙調査[ii]を行った。これにより、現在の両村の社会状況、および経済状況を量的に把握し、住民目線から本事業の評価を試みる。質問紙調査の概要については、宮島良明の報告（第 2 部報告①）を参照にされたい。

1　産業村開発事業への選定理由

産業村開発事業は、これまでに段階的に実施されており、1994 年の導入段階でタイ全国の農村からはじめに選ばれた 20 村は、東北部のトン・ファイ村に始まり、南部のキリウォン村に至るまでタイ全土にちらばっている。この 20 村が選定された理由として、大平哲（2008）(1) によれば、①市場の需要が見込めるユニークな特産品を生産していること、②内発的な生産者グループが存在していること、③観光スポットがあるか、観光スポットへ向かう途上に位置すること、④自然環境、伝統芸術・文化の持続性が見込めること、⑤コミュニティセンターを建設する土地があること、の 5 つの基準によって選定されている。

2　質問紙調査の結果

（1）ナタポー村における居住環境の特性

ナタポー村は、バーンライ郡バーンライ地区から 1.5 キロ東に位置しており、74 世帯・約 400 人が居住している（2012 年 9 月時点）。ナタポー村では、木綿の手織物が特産物となっており、綿は村で栽培している。主な生産過程は、綿花の収穫→種の除去→綿を紡ぐ→自然染め（染料として赤木質の木材、木の皮、葉、果樹、または泥が使われる）→織り機で生地を編む、となっている。製品としては、手織りの自然染め木綿生地製品、伝統的なスカート、マフラー、ショルダ

---

[i] タイの産業村プロジェクトの概要については、タイの農村コミュニティにおける地域振興及び居住環境に関する一考察－産業村開発事業の事例から－」、『住宅』、VOL.59、pp.76-81、2010 年 1 月、および『東洋大学地域活性化研究所所報』No. 8、No. 9 を参照。

[ii] 主な質問内容は次の 5 点である。①性別、年齢、出身地、家族構成、最終学歴、宗教などの「対象者のフェースデータについて（14 項目）」、②職業、労働時間、平均月収・支出、貯蓄額、借金額、家族生活などの「経済・社会的属性及び家族関係について（20 項目）」、③インフラ整備に対する満足度、自然環境・教育環境・公共交通・医療・福祉に対する満足度などの「居住環境について（16 項目）」、④村の活動への参加状況など「コミュニティ活動と意思決定への参加について（6 項目）」、⑤事業への参加の有無、住民による事業評価などの「産業村開発事業、その他に関する質問について（11 項目）」である。

ーバック、タペストリー、ベットカバー、テーブルマット、ブラウスなどがあり、村のコミュニティセンターやバンコクのチャトチャック市場で売られている。このコミュニティセンターは、JBIC の円借款で建設された。

質問紙調査の結果を主に、住民自らの村の居住環境の評価について整理する。

ナタポー村の電気設備、水道設備、下水設備などインフラ整備への満足度について、それぞれ平均値を算出したところ（表 1)、「電気設備」が 0.878、「水道設備」が－0.811、「下水設備」が－0.797 であった。電気設備に関しては満足度がやや高いが、水道設備と下水設備は満足度が低いといえる。ゴミ収集や教育などの行政サービスについては 0.067 であり、満足でもなければ不満足でもないといった平均的な評価であった。

表 1　ナタポー村のインフラ整備に対する満足度（N=74）

	電気設備	水道設備	下水設備	行政サービス(注1)
大変満足	0	0	0	0
満足	65	3	0	6
普通	9	8	15	67
不満足	0	63	59	1
大変不満足	0	0	0	0
平均値(注2)	0.878	-0.811	−0.797	0.067

注1　行政サービスは、ゴミ収集や教育を想定して質問している。

注2　平均値の算出方法は、大変満足が 2、満足が 1、普通が 0、不満足が - 1、大変不満足が - 2 の得点をそれぞれ配して、有効回答数と割って算出している。

住民の居住環境への満足度について、平均値を算出したところ（表 2)、現在の居住環境への満足度（N=72）が 1.000、文化・娯楽施設への満足度（N=74）が 1.000、村周辺の自然環境への満足度（N＝74）が 1.108、教育環境への満足度（N=73）が 0.932、公共交通への満足度（N＝73）が 0.685、医療への満足度（N=73）が－0.014、福祉・介護への満足度（N=73）が 0.110 であった。「現在への居住環境」、「文化・娯楽施設」、「自然環境」、「教育環境」については、満足度が高い結果となった。「公共交通」については、やや満足度が高い結果となった。一方で、「医療」、「福祉・介護」については、満足度が低い結果となった。

表 2　ナタポー村における住民の居住環境への満足度

	大変満足	満足	普通	不満足	大変不満足	平均値
現在の居住環境	0	72	0	0	0	1.000
文化･娯楽施設	0	74	0	0	0	1.000
自然環境	8	66	0	0	0	1.108
教育環境	0	70	1	2	0	0.932
公共交通	0	52	19	2	0	0.685
医療	0	6	60	7	0	−0.014
福祉･介護	0	11	59	3	0	0.110

注　有効回答数は「現在の居住環境」が 72 票、「文化・娯楽施設」が 74 票、「自然環境」が 74 票、「教育環境」「公共交通」が 73 票、「医療」が 73 票、「福祉・介護」が 73 票となっている。

一方、村内に問題があるかどうか尋ねたところ（N=74)、「ある」と回答した住民は 2 人（2.7%）であった。問題を指摘した住民に対してどのような点に問題があるのか尋ねたところ（複数回答)、インフラ整備に関するものであり、水道・下水道・電気にそれぞれ一つずつの回答であった。

将来どこに住みたいのか尋ねたところ（N=74）、「現在いる場所」と回答した住民は 73 人（98.6%）、「保障された場所ならばどこでも良い」と回答した住民は 1 人（1.4%）であった。

村が好きかどうか尋ねたところ（N=73）、「好き」と回答した住民は 73 人（100%）であった。具体的に村の何が好きか尋ねたところ、①近隣住民や友人との良好な関係、②居住空間、などを高く評価していることが分かった。

次に、村に対して誇りに思うことがあるかどうか尋ねたところ（N=73）、「誇りがある」と回答した住民は 72 人（98.6%）、「誇りがない」と回答した住民は 1 人（1.4%）であった。具体的に、村の何が誇りに思うのか尋ねたところ、①住民同士の助け合い（共助）、②村に職があること、③自然資源、などの意見が指摘されている。

（2）キリウォン村における居住環境の特性

キリウォン村は、ナコーンシータマラート県のランサカーから北へ約 9km のカムロン地区に位置する山々に囲まれた農村コミュニティである。2007 年 8 月時点では 860 世帯、約 3,200 人の住民が生活している。主な住民の職業は農業である。村長への聞き取り調査（2007 年 8 月）によれば、「キリウォン」と呼ばれる地域は四つに区分（ムー5、ムー8、ムー9、ムー10）されており、住民は家族や親戚が単位となり生活を営んでいる。村の森とタピ川の流域でドリアンやマンゴスチン、ランブータンといった果物が豊富に採れる。キリウォン村は、約 200 年前に移住してきた人々が、固有の植生にあった果樹などのプランテーションを古くから行ってきた村である[1]。

現在、キリウォン村では、20 を超える食品の加工品、石鹸の加工品、村の自然資源を活用して加工されたアクセサリー、衣類の草木染め、などの生産者グループが形成されている。その中でも、タイ一村一品運動（One Tambon One Product : OTOP）にも一部参入し、対外的にも広く活動している（詳細は吉田圭助の報告（第 2 部報告③）を参照にされたい）。

質問紙調査の結果を主に、住民自らの村の居住環境の評価について整理する。

キリウォン村の電気設備、水道設備、下水設備などインフラ整備への満足度について、それぞれ平均値を算出したところ（表 3）、電気設備が 0.394、水道設備が－0.151、下水設備が 0.098 であった。電気設備と下水整備に関しては平均的な評価であったが、水道設備は満足度が低いといえる。ゴミ収集や教育などの行政サービスについては 0.008 であり、平均的な評価であった。

表 3　キリウォン村のインフラ整備に対する満足度

	電気設備	水道設備	下水設備	行政サービス
大変満足	5	5	3	3
満足	66	30	18	38
普通	31	37	16	44
不満足	24	49	9	39
大変不満足	1	5	5	3
平均値	0.394	−0.151	0.098	0.008

注　有効回答数は「電気設備」が 127 票、「水道設備」が 126 票、「下水設備」が 51 票、「行政サービス」が 127 票となっている。

住民の居住環境への満足度について、平均値を算出したところ（表 4）、現在の居住環境への満足度（N=126）が 1.111、文化・娯楽施設への満足度（N=124）が 0.880、村周辺の自然環境への満足度（N＝127）が 1.520、教育環境への満足度（N=126）が 0.571、公共交通への満足度（N＝126）が 0.698、医療への満足度（N=123）が 0.691、福祉・介護への満足度（N=125）が 0.632 であった。いずれも平均的な評価よりも高い指数をしており、その中でも、とりわけ「現在への居住環境」、「自然環境」については、満足度が高い結果となった。「文化・娯楽施設」、「教育環境」、

「公共交通」、「医療」、「福祉・介護」については、やや満足度が高い結果となった。

一方、村内に問題があるかどうか尋ねたところ（N=124）、「ある」と回答した住民は 65 人（52.4%）、「ない」と回答した住民は 59 人（47.6%）であり、問題を指摘した住民の方が多い結果となった。問題を指摘した住民に対してどのような点に問題があるのか尋ねたところ（複数回答）、「麻薬」が 54 人（83.1%）、「ごみ」が 24 人（36.9%）、「住宅」が 1 人（1.5%）、「立ち退き（土地の保障）」が 2 人（3.1%）、「騒音」が 11 人（16.9%）、「大気汚染」が 3 人（4.6%）、「人間関係」が 4 人（6.2%）、「交通」が 4 人（6.2%）、「盗難」が 4 人（6.2%）、「水道」が 24 人（36.9%）、「下水道」が 6 人（9.2%）、「賭博」が 10 人（15.4%）、「電気」が 7 人（10.8%）、「住宅登録証」が 1 人（1.5%）、「公共スペース」が 1 人（1.5%）、「汚臭」が 7 人（10.8%）であった。以上の結果から、順位別にみると、①麻薬、②ごみ・水道、④騒音、⑤賭博となる。

将来どこに住みたいのか尋ねたところ（N=124）、「現在いる場所」と回答した住民は 94 人（75.8%）、「保障された場所ならばどこでも良い」と回答した住民は 28 人（22.6%）、「現在いる場所から近く、政府支援による保障された場所」と回答した住民は 2 人（1.6%）であった。

村が好きかどうか尋ねたところ（N=126）、「好き」と回答した住民は 125 人（99.2%）、「分からない」と回答した住民は 1 人（0.8%）であった。具体的に村の何が好きか尋ねたところ、①自然環境、②近隣住民や友人との良好な関係、③村の歴史、④居住空間、⑤ふるさとへの誇り、などを高く評価していることが分かった。

次に、村に対して誇りに思うことがあるかどうか尋ねたところ（N=123）、「誇りがある」と回答した住民は 115 人（93.5%）、「誇りがない」と回答した住民は 7 人（5.7%）、「分からない」と回答した住民は 1 人（0.8%）であった。具体的に、村の何が誇りに思うのか尋ねたところ、①住民同士の助け合い（共助）、②自然資源（果樹園）、③観光客との交流、④村に職があること、⑤村における生産者グループが加工している製品が OTOP の優秀な製品に選出されていること、⑥村の歴史・文化、⑦キリウォン村の周辺には南タイで最も高い山に囲まれている立地条件であること、などの意見が指摘されている。

表 4　キリウォン村における住民の居住環境への満足度

	大変満足	満足	普通	不満足	大変不満足	平均値
現在の居住環境	35	73	15	3	0	1.111
文化・娯楽施設	16	79	27	2	0	0.880
自然環境	74	45	8	0	0	1.520
教育環境	4	68	50	4	0	0.571
公共交通	10	73	39	3	1	0.698
医療	7	77	34	4	1	0.691
福祉・介護	8	71	39	6	1	0.632

注　有効回答数は「現在の居住環境」が 126 票、「文化・娯楽施設」が 124 票、「自然環境」が 127 票、「教育環境」が 126 票、「公共交通」が 126 票、「医療」が 123 票、「福祉・介護」が 125 票となっている。

3　まとめ

ナタポー村における居住環境で特徴的なのは、「現在への居住環境」、「文化・娯楽施設」、「自然環境」、「教育環境」については高い満足度を示した一方で、「医療」、「福祉・介護」については満足をしていないと回答した住民が多いことである。このことは、「行政サービス」への満足度が平均的な評価であったことからも、住民は、村と行政（オーボートー）との連携により、社会保障の制度を構築していくことを求めていることが考えられる。言い換えれば、地域コミュニティが成熟しており、社会保障の充実化へ住民の意識が芽生えているとも考えられる。また、ハード面の「水道設備」と「下水設備」についても満足をしていないと答えた住民が多いことがわかった。

村内の問題点については、「ある」と回答した住民が少なかった。その理由として、将来どこに住みたいのか尋ねたところ、「現在いる場所」と回答した住民が多かった。また、村が好きかどうか尋ねたところ、すべての住民が「好き」と回答し、①近隣住民や友人との良好な関係、②居住空間、などを高く評価していることが分かった。次に、村に対して誇りに思うことがあるかどうか尋ねたところ、「誇りがある」と回答した住民が多かった。その理由として、①住民同士の助け合い（共助）、②村に職があること、③自然資源、などを高く評価していることが分かった。

次に、キリウォン村における居住環境で特徴的なのは、現在の居住環境、文化・娯楽施設、村周辺の自然環境、教育環境、公共交通、医療、福祉・介護のいずれも平均的な評価よりも高い指数をしており、その中でも、とりわけ「現在への居住環境」、「自然環境」については、満足度が高い結果となったことである。この結果により、村の居住環境への住民の評価は高いといえる。一方で、ハード面の「水道設備」については満足をしていないと答えた住民が多いことがわかった。また、村内に問題があるかどうか尋ねたところ、「問題がある」と回答した住民の方が多かった。「問題がある」と回答した理由について、順位別にみると、①麻薬、②ごみ・水道、④騒音、⑤賭博であり、ハードの問題よりもソフトの問題の方を指摘している。これは、ナタポー村と同様に、キリウォン村にでも地域コミュニティが成熟しており、住民の社会問題への関心が高いことが伺える。次に、将来どこに住みたいのか尋ねたところ、「現在いる場所」と回答した住民が多かった。その理由として、村が好きかどうか尋ねたところ、「好き」と回答した住民が多く、①自然環境、②近隣住民や友人との良好な関係、③村の歴史、④居住空間、⑤ふるさとへの誇り、などを高く評価していることが分かった。次に、村に対して誇りに思うことがあるかどうか尋ねたところ、「誇りがある」と回答した住民が多かった。その理由として、①住民同士の助け合い（共助）、②自然資源（果樹園）、③観光客との交流、④村に職があること、⑤村における生産者グループが加工している製品が OTOP の優秀な製品に選出されていること、⑥村の歴史・文化、⑦キリウォン村の周辺には南タイで最も高い山に囲まれている立地条件であること、などを高く評価していることが分かった。

本稿で取り上げたナタポー村とキリウォン村では、いずれの事例でも居住環境に対する評価は高かった。住民から居住環境が評価された主な要因には、①村の自然資源、人的資源（良好な近隣関係）、②産業村開発事業や OTOP への参加による生業起こし、③観光交流、などが考えられる。それらを通して、住民は自らが住んでいる村を「ふるさと」と捉え、地域コミュニティへの誇りや愛着を醸成しており、持続的な村づくりを展開している。

［参考文献］

(1) 大平哲、「自立経済構築のための円借款事業とその評価 - タイ産業村事業の経験から - 」、『国際協力機構事業評価年次報告書 2008』、国際協力機構、2008

(2) 武井泉、「タイにおける一村一品運動と農村家計・経済への影響」、『高崎経済大学論集』、第 49 巻、第 3・4 合併号、高崎経済大学、pp.167-180、2007

(3) ボンピイライ・ルートウィチャー著・野中耕一訳、『濁流を越えてー南タイの果樹の里ー』、燐々社、1993

(4) 川澄厚志、「タイの農村コミュニティにおける地域振興及び居住環境に関する一考察ー産業村開発事業の事例からー」、『住宅』、VOL.59、日本住宅協会、pp.76-81、2010

［謝辞］

本調査はナタポー村住民、キリウォン村住民、現地調査協力者のアン・ジャルーンエンサイ氏、吉田圭助氏の協力により実現した。ここに記して感謝申し上げたい。

第 2 部　研究成果報告

報告③　（研究ノート）産業村プロジェクトを実施したキリウォン村と住民グループの概要

吉田圭助

[要旨]

本稿は、産業村プロジェクトを実施したキリウォン村に関し、キリウォン村の概要について文献と現地調査からまとめたものである。

はじめに－産業村プロジェクトに関して

工業省産業促進局（Department of Industry Promotion、以下 DIP）が、1994 年より実施した産業村プロジェクト（タイ語名 : khrongkaan muubaan utsaahakam : โครงกานหมู่บ้านอุตสาหกรรม）は、農村の産業や手工業を促進する目的で開始された。プロジェクトは第 1 期から第 3 期に区分されており、実施期間はそれぞれ 3 年である。参加した村は第 1 期（1994-1996 年）が 117 村、第 2 期（1997-1999 年）が 141 村である。産業促進局の評価基準により、期毎に優秀な産業村が表彰されている。優秀な産業村に選ばれた村は第 1 期が 22 村、第 2 期が 36 村であった。期毎にプロジェクトと優秀な産業村を紹介する報告書が出されており、参加村の名簿や優秀な産業村に選ばれた村の特色と概要、製品の紹介があり、評価基準などが紹介されている。

さらに、タイ政府観光庁と国際協力銀行（JBIC）が結びつき観光の要素を取り入れた産業村プロジェクト（タイ語名 : khrongkaan muubaan utsaahakam chonnabot pua kaanthongtiau : โครงกานหมู่บ้านอุตสาหกรรมชนบทเพื่อการท่องเที่ยว）が実施された。大平（2008）によると、「1998 年にこの 3 機関（国際協力銀行、タイ政府観光庁、工業省産業促進局）は産業村のうち有望な 20 の村にコミュニティ・センターを建設し、そこでの生産者グループの活動を促進させるべく、円借款事業の対象とすることで合意することになる。」とある。このプロジェクトに参加した村は 20 村であり、既存の産業村プロジェクトから 4 村が選定されている（参加村 20 村の概要は表 1 を参照）。観光の促進等を目指し、村にコミュニティセンターが建設された。この 20 村の選定には DIP が協力をしており、職員への聞き取りによると、村の結束の強さ、村付近の観光資源、コミュニティセンターを建設する敷地の有無という 3 点が特に考慮され、2、3 年をかけて選定されたという。村の結束の強さとは、村長、村の委員、住民が一丸となってプロジェクトに取り組むことや、村独自のグループがあり製品をつくっていること等、ということである。

既存の産業村プロジェクト第 3 期に関しては、第 1 期と第 2 期で優秀な産業村に選ばれた村や、産業村プロジェクトに観光庁と JBIC が結びつき実施された産業村プロジェクトに参加した村 20 村から計 67 村が参加し実施された。第 3 期に関しては、DIP より最終的な報告書は出されていない。

本稿で取り上げるキリウォン村は、観光の要素を取り入れた産業村プロジェクトに参加した村の一つである。キリウォン村は 200 年以上の歴史があり、1988 年には大規模な水害に遭いながらも住民たちが村を拓いてきた豊かな村として現在知られている。本稿においては、キリウォン村の概要について文献からまとめ、また現在活発に活動が行われている村の住民グループについてまとめる。

表 1　産業村プロジェクト参加村（20 村）の概要

番号	1	2	3	4	5
地方	北部	北部	北部	北部	北部
村	Baan thoong Faai	Baan Sathaan	Baan Paapu	Baan Sanpaamuang	Baan Thungluang
県	チェンマイ	チェンライ	メーホーンソーン	パヤオ	スコータイ
位置	メージェーム郡から西へ約2km	チェンコーン郡から南へ約6km	メーホーンソーンの中心から南へ約10km	パヤオの中心から西へ約12km	スコータイの中心から南へ約17km
宗教	仏教、キリスト教	大部分は仏教	仏教、キリスト教	住民の多くは仏教	住民のほとんどが仏教
特産品	織物	自然染めの織物	織物	水生植物を使った細工、かご、バッグ	素焼き物
主な職業	大部分は農業（稲作、畑作、果樹園、家畜）、米を売って収入を得ている。機織は副業。	大部分は農業を主に営む。枝編み、機織、食品加工が副業。	大多数は農業が主要な職業である。機織は副業。	大多数は農業が主要な職業である。水生植物による編み細工は副業。	職業は素焼き物をつくることである。ほとんどの家でこの職業をしている。
DIPによる産業村プロジェクト参加状況	-	―	第1期に参加	-	第2期に参加

番号	6	7	8	9	10
地方	北部	中部	中部	中部	中部
村	Baan Naatoncan	Baan khaam	Baan Baangcaochaa	Baan Naataaphoo	Baan Noongkhaau
県	スコータイ	スパンブリー	アーントーン	ウタイタニー	カンチャナブリ
位置	シーサッチャナーライ郡から東へ約18km	ウートーン郡から北へ約15km	アーントーン市から北へ約15km	バーンライ郡から東へ1.5km	カンチャナブリ市から東へ11km
宗教	住民のほとんどが仏教	住民のほとんどが仏教	大部分は仏教	大部分は仏教	住民のほとんどが仏教
特産品	織物	織物	籐細工、竹細工	古くからの柄の綿織物	織物と黒色宝石を使った装飾品
主な職業	大多数は、果物園を営む。例えば、ローンコーンやランサート。そして機織をする。	住民の主要な職業は畑作と稲作。農閑期には男性は日常で使用する竹細工をつくる。女性は家族が着る衣類をつくるために機織をし刺繍をする。	住民の大部分は農業が主要な職業である。現在では竹・籐細工が住民のもう一つの職業になりつつある。	農業である。サトウキビ、トウモロコシ、キャッサバを植え、副業の機織のために綿を植えている。	住民の主要な職業は農業である。副業として機織がある。
DIPによる産業村プロジェクト参加状況	-	―	―	第2期に参加、「優秀な産業村」の一村として評価されている	―

番号	11	12	13	14	15
地方	中部	東北部	東北部	東北部	東北部
村	Baan Huaikriap	Baan Chiang	Suun Klaang Chumchon Tambon Huaiphai	Baan Phookoong	Baan Naayaangklak
県	プラチュアップキリカン	ウドンタニ	ウボンラチャタニ	スリン	チャイヤプーム
位置	バーンサパーンノーイ郡に入る分かれ道から南へ10Km	ノーング交差点から北へ、約18km	コーングチアム郡から東北へ、約14－23km	プラーサート郡から北へ、約10km	テプサティト郡から北へ、約36km
宗教	住民の大部分は仏教	住民の多くは仏教	仏教	仏教	大部分は仏教
特産品	籐細工	模様を施した素焼き物	綿の手織物	絹の手織物	絹の手織物
主な職業	住民は農業を営んでおり、ゴム園や果樹園が主な職業である。	住民の大部分は稲作をしており、もち米を植えている。収穫は売りに出すよりも家族で食べる方が多い。主婦は工場から布を受け取り家で縫う。	住民の主要な職業は漁である。交替で稲作か畑作をする。	ここの住民の主要な職業は、稲作である。副業として絹織物をする。	住民の多くは農業を営む。とりわけ、畑作、サトウキビ、キャッサバを植える。農閑期には絹の手織りをするのが産業の一つである。
DIPによる産業村プロジェクト参加状況	-	―	―	-	―

番号	16	17	18	19	20
地方	南部	南部	南部	南部	南部
村	Baan Phumriang	Baan Naatiin	Baan Kalai	Baan Khiiriiwong	Baan Naatham
県	スラータニー	グラビ	パンガー	ナコーンシータマラート	ソンクラー
位置	チャイヤー郡から東へ、約7km	アーウナーング区から北西へ、約2km	パンガー県南西、約26km	ランサカー郡から北へ、約9km	パーダンベサーの3差路から北へ、約8km
宗教	大部分は仏教	ほとんどがイスラム教	大部分は仏教	ほとんどは仏教	大部分はイスラム教、30%は仏教
特産品	花模様を並べた絹織物	ココナツの透かし彫細	ゴムの葉を使用した造	自然染めの布	ココナツ細工
主な職業	80%は海岸で漁をしている。	住民の多くはゴム園をしており、副業で漁をしている。	住民の主要な職業は農業である。ゴム園や、ドリアン、ローンコーン、マンゴスチンといった果樹園をしている。	住民の主要な職業は果樹園（複数の種を混合した果樹園）	大部分は果樹園とゴム園を営む。
DIPによる産業村プロジェクト参加状況	-	―	―	-	第2期に参加、「優秀な産業村」の一村として評価されている

出典："เส้นทางภูมิปัญญา　หมู่บ้านอุตสาหกรรมชนบทเพื่อการท่องเที่ยว"（参考文献 5）を元に筆者訳・作成

注：「DIP による産業村プロジェクト参加状況」項目に関しては、産業村プロジェクトの報告書である"หมู่บ้านอุตสาหกรรมดีเด่น 2539"（参考文献 3）と"หมู่บ้านอุตสาหกรรมดีเด่น 2542"（参考文献 4）にある参加村の名簿と照らし合わせて作成

１．キリウォン村までの道程と観光地について

キリウォン村は、ナコーンシータマラート県ランサカー郡にある。バンコクからキリウォン村は、グーグル・マップの経路検索によると、792.8km、車で 9 時間 51 分である。国道 4 号線を南下、チュンポーン県から国道 41 号線に入りさらに南下していく。ランサカー郡へ抜ける 4015 線を走り、ランサカー郡からはカーウルアン山のある北方へ約 9km で到着する。村からナコーンシータマラート市内までは約 30km である。

2012 年 8 月 31 日午後 9 時に、キリウォン村での調査のためバンでバンコク都アソークを出発、食事等の休憩をして、スラータニー空港に到着したのは 9 月 1 日午前 9 時で距離は 703km であった。11 時過ぎにスラータニー空港を出発し、何度か道に迷いながらキリウォン村に到着したのは午後 2 時 40 分、バンコクを出発してから総距離 873km であった。

観光庁から出された産業村を紹介する資料によると、キリウォン村周辺の観光地としてはカーウルアン山やクルンチング滝、ナコーンシータマラート市内にあるプラ・マハタート・ウォラ・マハーウィハーン寺が紹介されている。

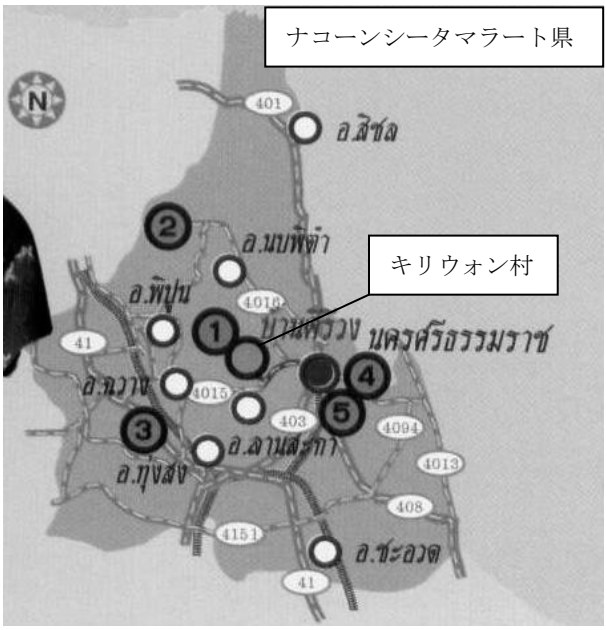

図１　キリウォン村の位置

出典："เส้นทางภูมิปัญญา　หมู่บ้านอุตสาหกรรมชนบทเพื่อการท่องเที่ยว"（参考文献 5）の地図

注：①－⑤は、キリウォン村付近の観光地の位置である。①カーウルアン山、②クルンチング滝、③ヨーング滝、④影絵の上映、⑤プラ・マハタート・ウォラ・マハーウィハーン寺

２．キリウォン村の概要

村の概要として、今年出版された"คีรีวง...ชุมชนบนวิถีดุลยภาพ"(参考文献 6)から抜粋し翻訳したものをまとめたものが下記である。

2.1 村と人口

キリウォン村は 4 つの小村から成り、総面積は 16,250 ライ（1 ライ＝1,600 平方メートル）である。キリウォン村（小村 5）、キリトーン村（小村 8）、クンキリ村（小村 9）、キリタム村（小村 10）である。4 つの村の名称には、「キリ」が共通してつくが、「キリ」はそれぞれが同じ村であるということを表し、「山の包囲圏にある村」という意味である。4 つの村を合わせ、世帯数は 1,050 世帯、3,120 人の住民が生活している。この 3,100 人以上の内、男性は約 1,500 人、女性は約 1,600 人である。約 10 パーセントが高齢者や子どもである。就学中の子どもは約 700 人であ

る。

2.2 住民の年間の平均収入と支出

キリウォン村の住民の大部分は果樹園から果樹を採って生計を立てており、世帯収入は年平均で約 60,000 バーツ、世帯の支出は年平均で 50,000 バーツである。支出は、衣服や食事、住居、医療といった四事であり、教育費と段階に応じた農業への投資である。

2.3 キリウォン村の貯蓄グループ

キリウォン村の人々は貯蓄が重要なものと考えている。1988 年に発生した強烈な水害からの教訓の一つである。外部からの資金に頼ることなく村の貯蓄グループの資金で、苦悩の状況から迅速に村を蘇らせた。貯蓄グループは、1975 年に発生した水害後の 1980 年に設立された。設立当初のメンバーは 51 人で、3,500 バーツの資金から始まった。2004 年度には、メンバーは 2,300 人となり、流動資本は約 6 千万バーツである。この貯蓄グループは、資本の所在となり、種々の村の福祉の基盤となっている。高齢者福祉や教育、医療等はいうまでもない。住民の 80%は貯蓄グループからお金を借りている。キリウォン村の生産品のために貯蓄グループから資金を借りることはよくあることだ。農業のために銀行や農業組合等から資金を借りることもある。そして、近所の人から借りることもある。99%の人は返済ができている。

2.4 果樹園“ソムロム園”

キリウォン村の“ソムロム園”と呼ばれる様々な種の混合果樹園には、果樹、野菜作物、ハーブ等、様々な種類があり（表 2)、この土地に元からあった木と一緒に植える。

キリウォン村の森には様々な種類の収穫があるが、とりわけ有名なものはマンゴスチンとドリアンである。マンゴスチンは質がよく味もいい。村からは、国内へ売りに出され、海外へも送られる。マンゴスチンの価格が下がると、住民はマンゴスチンを練り物にする。価値を上げるために加工し、長期間とっておいて食べられるようにし、食料を大切に保存する。キリウォンのそれぞれの木のドリアンの種類にはそれぞれ違った名前がつけられている。例えば、アイナムタオ、アイタイフアイ、アイドゥーク、アイナムターン等である。木や実の特性に従ってそれぞれ異なった名前がつけられている。

表 2　ソムロム園の植物

森の高層
チャンパー、タキアン、ルムポー、ビンロウ樹、ドリアン、サトー豆等
森の中間層
マンゴスチン、ドリアン、ラーンサート、ローンコーン、サトー豆等
森の低層
トウガラシ、ナス、レモングラス、パイナップル等
地中
ショウガ類、ウコン類等
その他
コショウ、キンマ等

出典："คีรีวง.....ชุมชนบนวิถีดุลยภาพ"（参考文献 6）より筆者訳、作成

3　現地調査より－住民グループの活動

2012 年 9 月 1 日から 2 日間の現地調査では、キリウォン村の住民グループを中心に聞き取り調査を行った。以前は 25 グループがあり、その内 5 グループが OTOP を取得しており、20 グループは取得していなかったとのことである。現在は 10 のグループが活動をしており（表 3)、訪問したグループは、表 3 中の 1）果実グループ、2）キリウォン村ハーブの家グループ、4)産業グル

ープ、5)葉グループ、の 5 グループである。

3.1　果実グループ

果実グループは 2004 年に結成したグループで、メンバーは 12 名である。キリウォン村の森でとれる石や実などの素材を使い、ネックレスやピアス、キーホルダーといったアクセサリーを作成している。製品は、国内外で販売する。住民の収入向上に役立てているということであった。

3.2　キリウォン村ハーブの家グループ

豊富に採れるマンゴスチンやハーブを使用し、石鹸やシャンプー、塗り薬などを作っている。マンゴスチンやハーブを使用した石鹸でブランドづくりに成功しており、登記した製造者に一定の収入をもたらしているという。グループリーダーからは、次世代のことを考えるとブランドづくりは大切であるという意向が伺われた。子どもたちに土地を相続するとしても分割され、やがては小さな財産となってしまう。しかし、子どもたちが自分の製品のオーナーになれば、自ら学費を賄うこともできる、ということであった。実際、グループリーダーの子どもが作成したハーブの石鹸があり、きれいに包装され店の棚に並べられていた。

表 3　キリウォン村で活動をする住民グループ

	グループ名	開始年	グループメンバー（人）	生産品	特記
1	果実　グループ กลุ่มลูกไม้ klum luuk mai	2004	12	アクセサリー	―
2	キリウォン村ハーブの家　グループ กลุ่มบ้านสมุนไพรบ้านคีรีวง klum baan samunphrai baan kiriwong	1994	15	ハーブ石鹸、シャンプー、塗り薬等	―
3	キリウォン村染物　グループ กลุ่มผ้ามัดย้อมบ้านคีรีวง klum phaa matyoom baan kiriwong	1996	12	自然染めの布を使用した製品	―
4	産業　グループ กลุ่มหัตถกรรม klum hatthakam	1999	17	ヤシの殻を使用した製品	障害者を含む
5	貯蓄　グループ กลุ่มออมทรัพย์ klum oomsap	1980	3000	―	―
6	キリウォン村ドリアン羊羹　グループ กลุ่มทุเรียนกวนบ้านคีรีวง klum turian kwan baan kiriwong	1995	10	ドリアン羊羹	高齢者を含む
7	葉　グループ กลุ่มใบไม้ klum bai mai	1999	10	自然染めの布を使用した製品	―
8	自然の色によるバティック　グループ กลุ่มลายเทียนผ้าบาติคสีธรรมชาติ klum laaithian phaa baatik sii thamachaat	2002	15	バティックを使用した製品	―
9	様々なバティック　グループ กลุ่มนานาบาติค klum naanaabaatik	2012	10	バティックを使用した製品	障害者を含む
10	ウアンお母さんのお菓子　グループ กลุ่มลูกหยีสามรสแม่เอื้อน klum luukyiisaamrot mee uan	2004	12	木の実を使用したお菓子	高齢者を含む

出典：住民提供のタイ語資料と聞き取り調査より

3.3　産業グループ

ヤシの殻を使用した製品を作成している。メンバーは 18 人である。グループリーダーは事故により下半身に障害をもつ。松葉杖をついて移動していた。事故に遭い障害をもってから仕事がなかったために、何か製品を作ることを考えたという。製品のアイディアのために、県内にある大学の研修に参加している、ということであった。

3.4　葉グループ

マンゴスチンや森の草木を使った自然染めをしているグループである。染めた布で、衣服やバ

ッグを作成し販売している。海外でも販売しており、ヨーロッパではグレーに染めた製品が人気ということであった。グレーの色を出すことはとても難しいという。結成当初、染物に関する知識はあまり持ち合わせていなかったが、大学の研修に数回参加し、後は試行錯誤を重ねて染物をしてきたという。海外からの訪問客も多く、日本からのボランティアもいるということであった。衣服やバッグの製品には、産業グループがヤシ殻で作成したボタンを使用するなど、他グループの製品を使用してのものづくりが見受けられた。

3.5　バティックグループ

自然の色を使用したバティックである。バティックの布を使用し、帽子や衣服、バッグを作成している。グループリーダーに話を伺ったのは、産業村プロジェクトで建設されたコミュニティセンターであり、各グループの製品がこのセンターに置かれ、販売されているということであった。

4 まとめ

キリウォン村は、1988 年に大水害に遭い、その後の復興へ住民自身が選択し、取り組んできた村である。筆者の今回のキリウォン村の訪問は 2 度目で 5 年ぶりであったが、橋の上からでも魚の群れが見える川の清流や、サトー豆の束をいくつも積んだバイクが村の市場へ売りに来る光景を目の当たりにし、前回の訪問と変わらずある自然の豊かさを感じた。村は大規模な水害から、外部の資金だけを頼りにはせず、貯蓄グループの資金で村を復興させてきた経緯をもつ。1981 年に 51 人のメンバーから始まった貯蓄グループに関しては、2004 年度にメンバーは 2,300 人となり、現在は 3,000 人に至っている。住民グループのグループリーダーへの聞き取りからは、製品の質や収入の向上のために試行錯誤をする姿が見受けられた。キリウォン村が当時産業村プロジェクトに選定された理由を DIP 職員に尋ねたところ、「村の結束の強さ」が挙げられた。キリウォン村は DIP による既存の産業村プロジェクトには参加していないが、産業村プロジェクトが開始された 1994 年以前から住民グループが活発に活動していたことが考えられる。その土地の自然とともに暮らす人々からたくさんの示唆が与えられていると筆者は考える。

[参考文献]

1) 大平哲（2008）「自立型経済構築のための円借款事業とその評価－タイ産業村事業の経験から－」独立行政法人国際協力機構事業評価年次報告書 2008

2) ポンピライ・ルートウィチャー著・野中耕一訳（1992）『濁流を越えて－南タイの果樹の里－』燦々社

3) กรมส่งเสริมอุตสาหกรรม กระทรวงอุตสาหกรรม 1997 "หมู่บ้านอุตสาหกรรมดีเด่น 2539"
－工業省産業促進局 (1997)『優秀な産業村　1997 年』、タイ語資料、筆者訳

4) กรมส่งเสริมอุตสาหกรรม กระทรวงอุตสาหกรรม 1999 "หมู่บ้านอุตสาหกรรมดีเด่น 2542"
－工業省産業促進局 (1999)『優秀な産業村　1999 年』、タイ語資料、筆者訳

5) สุรจิต จามรมาน / สุทัศน์ รุ่งศิริศิลป์ 2005 การท่องเที่ยวแห่งประเทศ
"เส้นทางภูมิปัญญา หมู่บ้านอุตสาหกรรมชนบทเพื่อการท่องเที่ยว"
－観光庁、Surajit Jamonman･Suthat Rungsirisin (2005)
『地方観光のための産業村』、タイ語資料、筆者訳

6) สุกรานต์ โรจนไพรวงศ์ คณะทำงานโครงการภูมิภาค-ประเทศไทย โครงการปัญญาชนสาธารณะแห่งเอเชีย (API) 2012
"คีรีวง.....ชุมชนบนวิถีดุลยภาพ"
－API Regional Project in Thailand, Sukran Rotjanaphraiwong (2012)
『キリウォン…均衡する方法からなる村』、タイ語資料、筆者訳